

# 巡礼街道

佐藤 良士

昨年6月の冊子(京町散策)に、西国三十三カ所巡礼の池田さんの文があるが、それによると、西国巡礼の縁起は次のように伝えられている。

「大和長谷寺の徳上上人が、病で仮死状態のとき地獄で閻魔大王に会い、『お前にまだ死ぬことは出来ない、世の中の苦しむ人々のために三十三カ所の観音霊場を作り、巡礼を勧めなさい』と言われ、驚いて蘇生した上人は三十三の霊場を設定した。その後、平安時代に19歳の若さで法王となった花山天皇が、比叡山や那智で修行して、荒れていた巡礼路を復興し、札所を定めたのが今日の西国巡礼の始まり」だが、しかしいずれも伝説の域を出ず、今日の巡礼路が定まっていくのは鎌倉末期から室町の頃で、一般の庶民に巡礼熱が高まっていったのは江戸時代以降のことであろう。

今回のポコアのコースには24番中山寺が含まれており、往時の巡礼路の一部を歩くことになる。現在の巡礼者の多くは車で、1日2~3ヶ所ぐらいずつ廻る人がほとんど、全コースを1番から歩いたという人はあまり居ないのではないかと。四国八十八カ所は精神的なものを求めて歩く人も多いようだが、西国の場合は都会に近いし、距離も手頃だし、参詣よりも帰りに新しい阪急で買い物をしてという人も多いようだが、江戸時代の巡礼者はどうなんだろう、案外、今とそれほど変わらじゃないか、ということ、当時の巡礼者の道中記を読んで知りました。

ここに紹介するのはトンボの本の「西国三十三カ所巡礼」の巻末に載っていた、常陸国(現在の茨城県)の久慈郡高柴村の益子広三郎の一行4人が文化9年(1812)に巡礼した時の記録で、短い文だが当時の巡礼旅の様子が分かるし、札所以外にも当時の旅人が訪れるところがよく分かる。何よりポコアで歩いたことのある寺社や地名が随所に出てきて実に面白い。要約していますが読んでみて下さい。



一行は正月4日に高柴村を出発、鹿島神宮や香取神宮、成田山に参詣して12日に江戸に到着、芝居を見物したり、浅草、湯島、神田などを見物して15日に江戸を発ち、25日に名古屋へ。桑名、津、松坂と歩いて28日に伊勢神宮に到着。

ここまでは伊勢参りのコースだが、このあと紀伊半島の東岸部を回り新宮を経て、札所1番那智山への到着は2月5日、いよいよ彼らは西国巡礼の旅に出るのである。

**那智から大坂まで** 那智山参詣の後、巡礼路の大雲取越え、小雲取越えという難所を越え8日に田辺に出ている。田辺から札所2番紀三井寺までは熊野街道で、鹿カ瀬峠、蕪(かぶら)坂、藤白峠などを越える。途中、清姫伝説で知られた道成寺に詣で、中将姫伝説の得生寺では宝物開帳をうけ「吾人前八文づつにて拝し申し候、是は必誠の所なり」と、喜びの感想を述べている。

札所2番紀三井寺に到着したのは10日であり、参詣の後、門前から舟に乗り和歌の浦の景勝を楽しんだ。そして、和歌山から大和街道を上り、岩出で紀ノ川を渡り札所3番粉河寺に。岩出では「同行富山奥の衆と一同にまかりなり、九人にて悦び入り申し候」と、富山奥の衆(富山人?)と同行になったことが記されている。

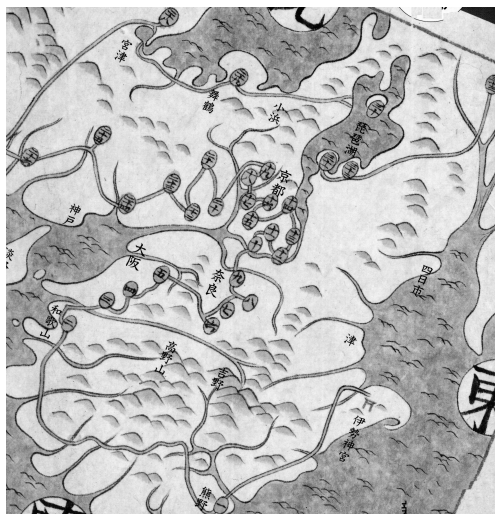
粉河寺からは紀ノ川沿いに上り、穴伏から札所4番槇尾寺に行くのが巡礼路の基本的経路だが、彼らはこの経路を通行せず、高野山へ登り、慈尊院へ下り、蔵王峠を越えて滝畑経由で槇尾寺へと向かっている。高野山では清浄心院という坊に宿泊、奥の院など山内諸施設を見物、さらに滝畑では光瀧寺で宝物開帳を受けた。

槇尾寺の次は札所5番、河内の葛井寺だが、東国からの巡礼者の多くはここから大坂見物に行くのが普通で、実際、彼らも大坂に2泊して、生玉明神、天満宮、東西本願寺などに参詣、嶋の内を見物。大坂で同行の一人が食当りになったが巡礼の旅は止めることは出来ず、翌16日には四天王寺に参詣、予定通り葛井寺に向かった。

**大坂から京へ** 葛井寺から札所6番壺坂寺までは主に竹内街道を利用する。途中、誉田八幡宮、通法寺、壺井八幡宮、叡福寺に参詣し、岩屋峠を越えて石光寺、当麻寺へと詣り、当麻寺では「開帳錢何人にても百廿文なり」という中将姫の蓮糸曼荼羅を拝観、さらに御所、土佐を経て壺坂寺に到着したのは2月17日、那智を出発してから12日目のことであった。

壺坂寺から次の札所の岡寺は近いが、一行はここから吉野へと向かい、蔵王権現、吉水院などで宝物を拝観して上市で宿泊、多武峰経由で岡寺に参詣した。

岡寺からは安倍、桜井をへて札所8番長谷寺へ向かい、次に伊勢街道を通行、途中



三輪明神、在原寺、人丸神社、帯解地蔵などに立ち寄りながら、19日に奈良の札所9番南円堂に到着。奈良では春日社、三月堂、大仏殿などに参詣し、奈良公園で「せんへい買ひ候て鹿へ食べさせ申し候へば、よく食べ申し候」と鹿と遊んだり、また土産物の墨を買ったりしている。

奈良からは大和街道を上り、木津川をわたり、玉水、長池、新田を通り宇治に到着。宇治茶を買って、札所10番三室戸寺や万福寺に参詣、六地蔵を経て、下醍醐寺から札所11番上醍醐寺へ、「是より上り坂道悪しく難処なり、三拾四丁上り」と今日でも難所の坂を登っている。上醍醐寺から次の札所岩間寺へは笠取峠を越える巡礼路を辿り、月の名所琵琶湖岸の唐橋の石山寺門前に到着したのは20日の夜であった。

石山寺からは膳所、大津を経由して札所14番三井寺へ向かうのが一般的だが、一行はここから東海道・中山道を下り、32番観音寺から近江八幡の長命寺へ行き、帰途は、長命寺から「是より船舁般九人にて舁貫五百文にて買ひ切り申し候、大津迄乗り申し候」と渡し船を利用、暮れ方に三井寺参詣の後、付近で宿をとっている。

三井寺からは、小関越えで京の東山の札所15番今熊野へと行くのが通常だが、彼らは唐崎、坂本を経て比叡山に登り、八瀬に下って鞍馬寺、貴船明神に参詣、賀茂川沿いに下って補陀落寺(小町寺)で宝物を拝観し、上賀茂神社に参拝した後に京に入っている。京では今熊野から札所19番革堂までを巡るのは勿論だが、案内を依頼し「案内銭百六拾文ほかに廿四文酒手遣し申し候」て、御所、吉田明神、黒谷、智恩院、祓園、高台寺などの名所旧跡をめぐり、扇屋正七方に23日から3日間宿泊した。

**京から姫路へ** 西山の愛宕山に参詣した後、亀岡の札所21番穴多寺、20番西山善峰寺、西国街道を下って札所22番総持寺と巡り、途中十輪寺、光明寺、長岡天満宮、石清水八幡宮、離宮八幡宮、宝寺、牛頭天王などに詣でた。総持寺から札所23番勝尾寺へと西国街道を歩き、さらに池田を経て札所24番中山寺へ。池田では「日本一の名酒有り、けんびし、万年酒、みりん、養命酒数々有り誠に名酒ゆへ少々たべ申し候へども至極酔入り入り申し候」と、酩酊している。

中山寺から次の清水寺へは六甲山の裏を通り、三田から立杭を経由するのが巡礼道だが、巡礼者の多くは、西宮に出て、西国街道を下ることも多い。一行も菟原(うはら)住吉明神、生田明神、兵庫築島寺、須磨寺、人丸明神などに参詣しながら、明石、大久保、尾上を経て2月30日に高砂に着いている。それから海路四国の丸亀へ渡り、金毘羅山、善通寺、甲山寺、曼荼羅寺、弥谷寺を廻り、帰路丸亀から船に乗り下津井に渡っている。そして姫路の書写山に到着したのが3月7日。そこからさらに東へ向かい、石の宝殿を見物、一乗寺に至り、巡礼路の逆コースで社、馬瀬を通過して御嶽山に登り、播州の山深き清水寺に到着した。



**姫路から岐阜へ** 清水寺からは福知山に出て、さらに北上し、大江山の東、外宮・内宮に参拝し、仏性寺で宿泊。大江山で頼光の腰掛石、鬼の足跡などを見物し、石川、府中へ下り成相寺に参詣後天の橋立を渡り、難所七曲り八峠を越え、田辺（舞鶴）を経て、29番札所松尾寺に到着した。松尾寺から高浜に出て、「此の処よき町なり宿茶屋多し、よき獵浜、魚類甚だ安し」と12日、海辺の温泉宿に宿泊した。

高浜から海沿いの街道を小浜へと向かい、九里半越えで山越えをして、保坂から琵琶湖岸の今津に出、札所30番竹生島までは渡し船で三里の湖を渡ることになる。ところが、この日琵琶湖が荒れたとみえて、「九ツ半時より乗り出で申し候、竹生島へ拾丁ばかりに相成り申し候ところ、俄にひ叡山おろし吹おこり、舟中皆々酔ひ申し候て船着かね申し候、残念ながら流し札に致し申し候て漸く長浜へ着船仕り申し候」と記録にある。流し札とは湖上に納札を流すことで、琵琶湖が荒れた時には便宜的手段としてかなり利用されたらしい。琵琶湖の渡しは結構危険を伴うことだったのである。

長浜に宿泊したのが3月14日、翌日北国街道で米原に出て、京の宿から荷送りしておいた土産の品を受取り、米原から中山道を、醒ヶ井、柏原、今須、関ヶ原、垂井、赤坂と歩き、「巡礼街道」を通行して最後の札所、谷汲山華嚴寺へ参詣している。

華嚴寺では巡礼終了の儀礼があり、文政12年（1829）の巡礼案内記には「当寺において役銭とて一人前に十二銅を納め、本尊の前にては役僧出て懺悔の文十念を受けらる、此の所に笈摺（おいずる）を脱ぎ、仏前に納め、また髪を切りて納めるなり、笈摺望みあれば三十三銅を上て請け戻るなり」とある。旅をともにした笈摺を最後に収めて、それから三十三文を払って買い戻すのである。一同はそれから門前の茶屋で昼食を取った。それは那智山を出発してから42日後のことである。

その後、彼らは中山道を下り、善光寺、妙義山、榛名山、日光に参詣してから高柴村に帰った。「同行中機嫌よく、四月四日七ツ時着き仕り申し候、皆々悦び入り申し候かしく、実に3ヵ月におよぶ長い旅であった。

彼らが西国巡礼の旅をしたのは今からちょうど二百年前の江戸後期。この頃の人にはよく旅をした。

十返舎一九の「東海道中膝栗毛」の初版本が刊行されたのが10年前の享和2年で、江戸期を通じて最大のベストセラーになるこの本は庶民の旅行熱を煽ったに違いない。広重の「東海道五十三次」の浮世絵が発売されるのは少し後だが、人々は近江八景などのような各地の観光地が絵刷りで旅に憧れた。巡礼の道を旅する人々も、自然を楽しみ、食事を楽しみ、人情を楽しみ、人生を楽しんで旅をしたに違いない。それは今の我々と同じかもしれないが、只一つ違うのは彼らは自らの足だけが頼りの旅であったということである。

（カットは版画家木田安彦氏の素描です）

